
隠れ家

Lionnne

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隠れ家

【Nコード】

N0292J

【作者名】

Lionnne

【あらすじ】

松田純平は大学の友達、沢井秀都と男二人で箱根へ旅行に行く。その旅行先で知り合った、高橋一花、伊東鈴とともに山奥の何十年も廃墟になっている家に肝試しに行くことになった。

着いた先は、何の変哲もない一軒屋。

家の中には心霊研究部と名乗る謎の大学生。

いなくなる仲間。

何故こんなことになったのか…

一体みんなどこへ…。

次々と襲い掛かる恐怖に純平たちは大学生たちと協力して立ち向かう！

だが…悲惨な現実の裏に、悲しい過去があった…。

プロローグ

和希「はやく!」

真美「待って!」

和希「まったく!本当のろまんだから!」

真美「はあはあ…。うん…うめん…」

…?

真美「あれ?信ちゃんは?」

和希「知らないよ!おまえ一緒だったんだろ?!」

真美「信ちゃん、真美より先に走って和君の所に行ったんだよ?!」

和希「はあ?来てないよ!」

真美「本当だもん！真美よりずっと先に行って行ったもん！」

和希「…おつかし〜な〜！」

真美「……」

和希「まっい〜か！先行つてよ〜ぜ！」

真美「え〜！ここで待ってた方がいいよ」

和希「大丈夫だよ！毎日通ってたんだから、俺達がいなきゃ先行つて
るって！なっ？！」

真美「う…うん」

和希「もう着いてるかもなっ？！」

真美「…じゃあ、行ってみていなかったらまた、戻って来ようね！」

和希「おう！」

旅行

ピピピピピ

バチンッ！

騒がしく鳴る目覚ましの音で俺は起きた。

純平「……」

ゴソゴソ…

純平「…もう6時か」

そう言うと、俺はあくびをしながら布団から出た。

今日から2泊3日、親友の秀人と旅行に行く。

場所は箱根。

俺は支度をして、昨日用意したカバンを片手に家を出た。

起きてから家を出るまでの所要時間、20分。

愛車のエステイマに乗り、秀都の家へ向かった。

俺の家から秀都の家までは車で約15分。

早朝ともあって、いつもよりも5分早く到着した。

6：30

約束の時間は6時45分だが、俺は到着したと言っ連絡を秀都に入れた。

プルプル…

が、コールはするものの電話に出ない。

純平「……。まだ寝てんのか？」

一度、電話を切りメールを打つ事にした。

カチカチ…カチカチカチカチ

打ち終わり送信を押そうとしたその時、俺の携帯が鳴った。

秀都だ。

純平「はい」

秀都「あつ！純平？オレオレ おはよう！」

お前はオレオレ詐欺か！
てか古いだろ！

秀都「どしたの？まさかもう着いたとか？！」

純平「ああ、着いたよ。下で待ってるから！」

秀都「早くね？まあ、いいや。もう少し待ってて！」

純平「…わかった」

電話を切り、

純平「…旅行か」

と、呟きながら、俺は秀都と初めて会った時の事を思い出していた。

旅行

二年前

まだ、肌寒さが残る4月、俺は市内の大学に入学した。

この大学を受けた理由は、家からバスで10分だから。

入学から一週間、校舎裏の芝生の上で一人昼飯を食べていると、背後から俺を呼ぶ声がした。

秀都「松田純平君!!」

…誰だよ

振り返ると満面の笑みを浮かべ秀都が立っていた。

純平「誰?てか、何で俺の名前知ってんの?」

秀都「松田君、有名だもん！笑」

純平「はあ？わけわかんねえ…」

秀都「で？何してんの？

」

純平「飯食ってんの！」

秀都「見ればわかるう」

純平「じゃあ聞くなよ！」

秀都「フフっ」

気持ち悪い程の笑顔を浮かべると、秀都は自己紹介を始めた。

秀都「俺、沢井秀都！ 大学 学部に通う18歳です！あと」

と、初対面の俺の前で聞いてもないことまでベラベラ喋りだした。

しかし、良く喋るな…

俺、こつゆう人苦手なんだよな…

それからというもの、秀都は俺の周りをチヨロチヨロするようになり、俺達は自然と仲良くなっていった。

沢井秀都

ルックスは男の俺から見ても申し分はないが、この男半端じゃないくらいよく喋る。

その上、時間にルーズで女好きでお調子者と救いようのない奴だ。

だがその反面、友達思いで面白く、よく気が利く。

たまにムカツクこともあったが、秀都は俺にとって大切な友達へと変わっていった。

昔の思い出に酔いしれていたその時、

「バンッ!」

と、凄い音がし俺は現実の世界に戻された。

音の方を見ると、助席の窓ガラスに秀都がへばりついていていた。

俺と目が合うとガラスから離れ、助席のドアを開け車に乗った。

秀都「いやゝ 遅くなってすまないねゝ」

時計を見ると7時をまわっていた。

純平「相変わらず、時間にルーズだな。時間はちゃんと守れよ」

秀都「ごめんごめん!お化粧に時間掛かっちゃって!笑」

純平「…じゃあ出発すんぞ」

秀都「…はい。笑」

エンジンをかけ、車は箱根へと走り出した。

旅行

高速に乗りしばらくすると、

秀都「ねえねえ、俺さ」 ガイトブック買ったんだよね」

秀都は嬉しそうにカバンから箱根のタウンガイドを取り出した。

秀都「じゃーん！いろいろサーチしましたよ！」

あらかじめ付箋を挟んでおいたページをめくり、俺に見せた。

秀都「どお？どお？」

純平「…見れると思う？」

秀都「あゝ 運転してるから無理だよな」

純平「…うん」

秀都「じゃあ、読んであげるね（ハート）」

秀都「えつと…」

と、ホヤホヤのカップルみたいな会話が車内で約一時間繰り広げられた。

その間、俺が発した言葉は…

「うん」

「そう」

「へえ」

「いいね」

のみ。

さすがに、聞いているのみとはいえ、疲れたな…。

一方の秀都も、一時間も喋っていたせいか疲れたのだろう、無口になり外をボーと見ている。

20分の沈黙を経て、秀都の口がまた開いた。

秀都「あゝっ!!」

いきなり叫んだ声にビクつく俺：

純平「ッ何だよっ!!」

秀都「俺ねゝ CD持って来たんだゝ」

またしても、カバンをゴソゴソあさりだした。

純平「何持ってきたの？」

秀都「L・Arc-en-Ciel!略してラルクみたいなゝ」

こんな秀都とも音楽の趣味は合う。

純平「おっ！いいね　かけようぜ」

と、好きな音楽を目の前に俺のテンションは一気に上がった。

オーディオにCDが入ると、1曲目が流れた。

花葬だ…！

前奏でわかる俺！スゴイだろっ！

てか、古くね？笑

と、思いつつも曲を楽しむ俺。

バラバラに

歌に入った瞬間、vocalのハイドと重なりもう一つ声が入ってきた。

秀都「バラバラに」

純平「……。」

秀都は曲に合わせてでかい声で歌い出した。

聞こえね〜…。

せつかくラルクに浸るチャンスが秀都のリサイタルを聞く羽目になった。

声を裏返しながら乗りまくってる秀都に、

聞こえないよ!!!

とは言えず、高速を下りるまでリサイタルを「タノシンダ」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0292j/>

隠れ家

2010年10月21日22時32分発行